
すれ違い（馨夢？）

峰春秋人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すれ違い （馨夢？

【Nコード】

N4103M

【作者名】

峰春秋人

【あらすじ】

馨の恋愛です。

せつなくはない気がする

(前書き)

だあー光がでてない

「ひ・・・光君。私・・・。」

「僕は馨だよ。」

「え？」

「光と僕の机間違えたでしょ？」

「あ・・・。」

「でもさー僕は君が好きなんだ。」

「え！」

「だから僕と付き合ってくれない？」

「・・・ひ・・・光君がいいって言っなら。」

「・・・だってよ、光。」

「え？」

「どっちでもいいんだぁー君。」

「何様のつもり？」

「ひどい！」

そんなことが昔あったと常陸院ブラザーズは音楽室のソファーに座りながら考えていた。

「光！馨！」

「ん？」

環の声と一緒にチョップが二人の頭に落ちてくる。

「なに！」

「お客様がお待ちだぞ。」

そっいつて環の視線の先には何人ものお客さんがいた。

二人はにっこりと笑ってそのお客さんに笑顔を振りまく。

「でも、馨。あの手紙いいのか？」

「あ……。殿。ちよつと用事を済ませてから行くよ。」

「用事？」

「ラブレター。」

「ふーん……。また中学のように遊ぶなよ！」

「わかってるよ。」

そういつて二人は中等部の時のことを思い出してホスト部の門を後にした。

桜蘭高校の裏庭には薔薇が咲き乱れてとつてもきれいなところだ。

そこに立つのは光が馨を待つ一人の中等部の服を着た少女。

茶色い髪の毛が背中の中あたりまで伸びていて前髪は少し長めといった感じだ。

少女を見つけた瞬間光が薔薇の中に潜る。

馨が少女のところにツカツカと歩いて行った。

「僕に手紙をくれたのって君？」

優しい口調で声をかける馨は手に持った薄ピンクの封筒をヒラヒラとして見せる。

光の声にこちらを向いた少女。髪の毛が風に乗って一気に右へと流れる。

それを手で押さえながら目の前にいる光に目を向ける。

その目は大きくて淡い黒色をしていた。

（ルックスとか顔は悪くないね。）

そう思つて口を開く。

「君さー僕と馨の机間違えたでしょ？」

「え？」

「馨が好きなの？」

「好きです。」

「でもさー馨は好きな人いるみたいなんだ。」

「そうなんですか。」

「でさー僕と付き合ってくれない？」

「？」

「僕さ君に興味があるし好きなんだ。」

「・・・お断りします。」

初めての返答。

薔薇の中に隠れていた光も、答えをもらった馨もどちらも驚きの色を見せた。

少女は悲しそうな顔も嬉しそうな顔もしないで淡々と言葉を紡いだ。

「私が好きなのは馨先輩だけです。光先輩とそりゃ・・・顔とかすごい似てると思います。けど、二人とも性格は全く違います。だから、いくら光先輩が私を好きでも私は馨先輩が好きなのでお断りします。」

光と馨はいまだに驚きの色を隠せないでいた。

そして少女の再び開かれた口から出た言葉に二人はもっと驚きの色を濃くさせた。

「ところで・・・なんで馨先輩が光先輩って偽ったんですか？」

その言葉の意味は一瞬では理解できないだろうがよく考えてみるわかってくる。

光と馨は最初は頭にクエスチョンを浮かべていたが時間がたつにつ

れて理解した。

【この子……。目の前にいるのが馨だっけわかってる！】
光の脳内で電気が走って思わず薔薇から身を出してしまう。

「ほら。私の前にいるのが馨先輩です。」

「……。なんで？」

「……。雰囲気です。」

「え？」

「馨先輩は落ち着いた感じの雰囲気で光先輩は活発な感じです。」

「雰囲気なんて初めて言われた。ねえー光。」

「ああ。」

「やっぱり……。誰かいると思ったなら光先輩だったんですね。」

「誰かいるって……。さっきから立ってたよ。」

「え？そうなんですか？すいません。私……。目が見えないので。」

思わず二人は目を見開いて少女をまじまじと見つめる。

白い棒は一切握られておらず手は前で組まれている。

「あのさ……。白い棒は？」

「えーとその……。さっき落としてしまって。拾おうとしたら先輩が来て……。スイマセンが馨先輩。近くに落ちてると思うんです。取ってくださいませんか？」

悲しそうな目をする少女に馨はうなずいて棒を探そうとしやがみこんだ。

光は少女のそばによって肩を軽く抱きしめた。

「光先輩。有難うございます。」

「えーと名前は？」

「妃鶴飛鳥ひつるあすかです。」

「飛鳥ちゃんってさーどうして僕の瞳をしつかり見れるの？」

唐突に光が飛鳥に聞く。

飛鳥の大きくて丸い瞳が光の瞳を見つめている。

それは目の見えない人とは思えない。

「私が視力を失ったのが二年前なんです。だから感覚的にわかるんです。」

「へえー。」

「ちょっとじつとして下さい。」

「ん？」

そついうと飛鳥は細くて白い腕をゆっくりと伸ばして光の顔を触った。

冷たくてしつとりした指が光の輪郭などをなぞる。

「・・・すごくきれいな顔立ちなんですね。」

「そう？」

「はい。すごくきれいです。」

「顔に触っただけでわかるの？」

「うん。わかるよ。」

「あつた！」

馨の声が薔薇園に響く。

そしてその手に握られた白い棒を持ってゆっくりと飛鳥に近づく。

「はい。」

「有難うございます。馨先輩。」

「えーと・・・名前は？」

「ですから、妃鶴飛鳥です。」

「妃鶴ってあの・・・大手花メーカーの？」
「そうです。」

そっいつて飛鳥はにつこりと笑う。

真っ黒な飛鳥の瞳がまたまっすぐに馨のことを見つめていた。

「すごい綺麗な目だね。」

「ありがとうございます。で・・・馨先輩。」
「ん？」

「付き合ってくださいか？」

すっかり忘れていたその言葉に思わず押し黙る馨。
光は心配そうに後ろから見つめていた。

「えーと・・・一週間のお試し期間にしない？」

「お試し期間？」

「うん。僕も君もまだお互いよく知らないから一週間だけ付き合うの。」

「んー。馨先輩はいいんですか？」

「うん。」

「なら・・・いいですよ。」

この手は何度か使ったことがあった。

めんどくさいことかに・・・。

でも、飛鳥は違った。本当に知らないから。

光と馨はすぐに部室へと戻って行った。

「あれ？光に馨。今日は休みなんじゃないの？」

「ハルヒ。いや・・・ちょっと出かけてただけ。」

「ふーん。環先輩が探してましたよ。」

「おお。」

そういつて光と馨はハルヒの話を聞いていたのかいないのかドカッとソファ―に腰を置いた。

馨は飛鳥のことを思い出してデートのプランを話し始めた。

「光。あのさーどんなデートがいいと思う？」

「・・・目が見えないから音楽系とか？」

「でも、花が好きだから花園とか？」

「うーん・・・なんか初めての所に行かせたらいいんじゃないの？」

「モールとか？」

「買い物でも行こうかな。」

「そうすれば？」

「光。」

「ん？」

「近くで見ててよ。僕自身ないから・・・。」

「・・・いいよ。」

優しく微笑んだ光の顔を見て馨も自然にほほ笑んだ。
そこへ現れた影は二人の頭をばかりと叩いた。

「こら！部活動をさぼるとはいい度胸だな！」

「だーから。」

「休むって言ったじゃん。」

「用事！って言っていたぞ。ったく。で、丁重に断ったのか？」

「・・・いいや。」

「ん！またいじめたのか！」

「違うよ。」

光がいつにもなく冷静な声で環の顔を見上げた。

環がしばらく黙ったままでいたがすぐに理解したのか表情がどんどん変わっていった。

「ま・・・まさか。」

「そう。」

「付き合うのか！」

大声で言ったため音楽室にいた部員には聞こえてしまっただろう。環の大声を聞いて二人は耳をふさいだ。

「え！ひかちゃんとかおちゃん付き合うの？」

「へー。おめでとう。」

「おめでとう。」

「支持率が下がらないといいが・・・。」

四人の部員から思い思いの言葉がかけられる。光と馨はほほを膨らせて部員に告げる。

『お試し期間中なの！』

「お試し期間だと？」

環が二人の顔をまじまじと見つめて尋ねた。ほかの部員も事情を知りたそうだった。

「だーから、中等部の子が馨を好きなんだけどお互いよくわからないからお試し期間中なの。」

光が淡々と説明して馨に同意を求めるように視線を移す。馨もつなずいてみんなを見渡す。

「へえー。馨のことが好きな中等部の子かあー。」

「どこの子なんだ？」

「大手花メーカーの娘さん。」

「妃鶴飛鳥嬢か？」

「そう。」

「鏡夜先輩。知ってるんですか？」

「知ってるも何もうちの学校の薔薇はすべて妃鶴家から買い取っているものだ。」

「えー！じゃ、あの庭園の薔薇も？」

「そうだ。ちなみに部の薔薇もな。」

「へー。」

はじめて知る情報に納得する部員一同。

「ほら。まだまだ知らないことがたくさんあるからお試し期間なの。」

「

「そうそう。」

「ふーん。」

「その間部は休むのか？」

「まあ・・・2日くらい。」

「そうか。まあ、いいだろう。」

環の了承を得ると二人はバックを片手にさっさと退室してしまった。

「どう思う？お母さん。」

「何がですか？お父さん。」

「目の見えない障害者のことを本当に馨が愛せるかってことですよ。お母さん。」

「さあー。わかりませんよ。お父さん。」

親子の会話を済ませて二人も帰る支度を始める。

「崇。僕はねえー思うんだ。かおちゃんなら・・・きっとあの子を
幸せにできるよ。」

「・・・そうだな。」

埴ノ塚、銕ノ塚は先に音楽室を後にした。

「馨がうまくいきますように。」

そう呟いてハルヒも帰っていく。

次の日はカラッと晴れたいい天気だった。

ダブルベッドの中一人さみしく起きた光。隣には馨の姿がなく変わ
りに自分の携帯に紙が挟まっていた。

「光へ

今日はやっぱり一人で行ってみる。

モールで飛鳥ちゃんに服でもプレゼントとするよ。」

そう書いてあった。

なんだか心底心配になったけど光は薄く笑って軽井沢のことを思い
出す。

途中から馨は付いてきてなかった・・・だから大丈夫。

そう無理に思っただけは自分を納得させた。

そして、もう一度眠りについたのであった。

「お待たせ。」

「あ。馨先輩。」

真っ白なワンピースを着た飛鳥を見つけて馨は駆けつける。
にっこりと笑ってこちらを向く。

でも、その手には白い棒が握られていた。

「大丈夫？」

「ん？」

「一人で来たんでしょ？」

「まあ・・・でも。大丈夫ですよ。」

「そっか。それじゃ行こうか。」

そういつて馨は飛鳥の開いていた手を握った。
が、飛鳥は

「か・・・馨先輩。」

「ん？」

「あの・・・手を握られると歩きにくいんです。」

そういつて手からするりと離れた。

「ああ。ごめん。なら・・・。」

そういつて馨は飛鳥の手をゆっくりとつかんで自分の腕にからめた。

「こうすればいいかな？」

腕にすがりつくような感じになった飛鳥。

けど、満足そうになっにっこりと笑ってうなずいた。

馨も笑ってゆっくりと歩き始めた。

目の見えない障害者と歩くにはいろいろ大変かと思った馨だが、そ

うでもなかった。

飛鳥は馨にすべてを任せた感じで安心して白い棒を使わずに歩いていた。

「怖くないの？」

「はい。馨先輩がいるから。」

「そっか。」

「で、どこ行くんですか？」

「洋服買ってあげる。」

「洋服ですか？」

「うん。一人じゃ買いに行けないでしょ？」

「はい。あの人ゴミに一人で行くのは結構危険で……。」

そういつているうちについてしまった。

人の賑やかな声がひっきりなしに聞こえる。

「これが庶民の店なんですか？」

まるで目の前の光景が見えてるかのように言う飛鳥。
馨は「そう。」と言ってうなずいた。

「うわー。すごいですね。」

「うん。僕もハルヒに教えてもらったんだ。」

「藤岡先輩ですか？」

「知ってるの？」

「はい。埴ノ塚さんと銛ノ塚さんに聞いて。」

馨の頭に自分の先輩の弟ズが浮かぶ。

「馨先輩ってお母様がデザイナーなんですよね？」

「そうだよ。」

「私の服を選んでもらってもいいですか？」

「いいよ。そのつもりだったし。」

クシヤリと優しく飛鳥の頭をなでる馨。

頭をなでた瞬間飛鳥は幸せそうな顔をして目を閉じた。

「最初は何が欲しい？」

「えーと・・・ワンピースがいいです。」

とりあえず近くにあった服屋に入っていく。

綺麗に並べられたたくさんさんの服をぐるりと見渡して馨はある一枚のワンピースに目をつけた。

それは薄水色の爽やかな印象のワンピースだった。

「飛鳥ちゃんって肌が白いよね。」

「そうですか？」

「うん。だから、濃い色のほうが肌が強調されるんだ。」

「そうなんですか？」

「うん。だからこれかな？」

「何色ですか？」

「ああ。ごめん。水色だよ。」

そっとうと飛鳥は優しくワンピースをなでた。
まるでワンピースを確かめるかのように。

「すごくきれいなね。」

「うん。とっても似合うよきっと。」

「じゃ、買っわ。」

そういつてにつこりと笑う飛鳥を見て馨もにつこりと笑う。
ワンピースをもって馨はレジへとむかう。
その時、

「ちょっとそれ私が目をつけたものなのよ！」

大声を張り上げたものに店にいた何人かが気づいて視線を向ける。
同じく馨も目を向ける。

茶髪でチャラついた感じの女は目の前にいるカップルから服を取り
上げていた。

「何を言ってるんだ！その服は僕らが先に見つけてレジに持ってい
こうとしたんだ！」

負けじと相手の優しそうな男も声を張り上げた。
が、隣に現れた大きなチャラ男の姿に一歩後ずさったが。

「でも、目をつけたのはあたしらなのよ！」

そういつて踵を返して嫌なチャラカップルは馨達のいるレジへと向
かってきた。

馨は不安になっていた飛鳥の頭をなでて肩に手を置いた。

「ちょっと早くしてくれない！」

どやされる馨。もっと不安になって思わず馨の服の裾をつかむ飛鳥。

「あー。すいません。」

そういつて馨はレジにワンピースを乗せながら後ろのギャルに目を

向ける。

「うわぁー。あんたかつこいいねえー。」

そういつてチャラ女のほうが馨に寄り添う。が、馨はスルリとかわして睨みつける。

「あんた今一人で買い物中？」

「いや……。連れがいるけど何か？」

そういつて隣にいた飛鳥の頭をなでる。

チャラ女が飛鳥を見つめてそして、

「こんな女より私のほうがいいでしょ？」

「痛ッ！」

飛鳥を強く押した。周りが見えなくて思わず転ぶ飛鳥。

「飛鳥！」

馨はチャラ女を突き飛ばして飛鳥に寄り添う。

思わず「飛鳥」と叫んでしまうほど馨は慌てた。

「大丈夫か？」

「うん。大丈夫です。」

「痛い。もう！私が誘ってるのに来ないの？」

そういつとチャラ女はチャラ男に視線を移して何かを合図した。

「てめえー人の彼女をー！」

「あの。ちょっと静かにしてくださいませんか？」
「はあ？」

いきなり飛鳥の声が響いた。

「ここはあなたたちだけの世界じゃありません。周りのことをわきまえて礼儀くらいたしなったらどうですか？」

「なんだと!？」

「貴方達の持つているそのＴシャツ。はやくあちらのカップルに返して下さい。先に手に取ったのは彼女たちですよ。それにまだあるでしょ？そちらを取ればいいんじゃないのですか？」

その大人びた口調と態度にチャラカップルはたじたじ。そして、周りの睨みつけるような視線に渋々Ｔシャツを投げつけて帰って行った。

「大丈夫？」

「はい。ところで、このＴシャツをあのカップルに。」

「うん。」

そういつて馨はさっきのカップルにＴシャツを渡しにいった。

「ありがとうございます。」

「いや。いいんだよ。」

「あの子にもお礼を。」

「自分たちで言っただけで。」

そういつて馨はカップルを連れて行く。

「飛鳥。」

「あ！もしかして目の前に？」

「うん。」

「大丈夫ですか？」

「有難うございます。」

「いえいえ。」

日が暮れて行き周りがどんどん暗くなってきた。

「飛鳥。そろそろ帰ろうか？」

「うん。」

「楽しかった？」

「うん。今日はありがとう。」

自然と喋り方が慣れ始めて初めて会った時とは違う喋り方になっていた。

「明後日は平気？」

「うん。」

「じゃ、玄関で待ってて。」

「うん。」

そういつて二人は別れて行った。

明後日にまた会えることを少し楽しみにして。

「へえーうまく行ったんだ。」

「うん。」

「このまま順調にいくの？」

「えーと・・・わかんないかな。」

心底楽しそうに馨は光に話した。
光は心配そうな顔からにっこりと笑顔に戻った。

明後日。約束の日になった。

馨は中等部の玄関でまっていた。
空がだんだんと曇っていき馨は少し心配そうな顔になる。

「あ！馨先輩よ。」

下級生が声をかけるが笑顔で対応してそこを動こうとはしない。
馨は待つて待つて待つて……。ずっと待った。
けど……。飛鳥は来なかった。

馨の顔が曇っていきそして……。体が自然に動いていき玄関を後にした。

（信じてたのに……。なんで来てくれないのさ。）

雨が馨を襲った。
まるで馨の心を現すかのような雨。
その時、

「馨先輩！」

聞き覚えのある声が後ろから聞こえてピチャピチャと水たまりを蹴飛ばす音がした。

振り向くと白い棒を投げだして感覚だけで走ってくる飛鳥がいた。

「飛鳥……。」

「馨先輩！」

「なんで来なかったのさ……。」

「え？」

小さくつぶやきながら覇気のこもったその言葉に飛鳥は首をかしげる。

「僕・・・ずっと待ってたんだよ！なのになんで！」

「・・・。馨先輩。」

「何さ！」

「・・・もしかして中等部の玄関にいました？」

その言葉に馨は飛鳥の目を見つめた。

「私・・・高等部の玄関にいました。」

につこりと笑う飛鳥の顔を見て馨は飛鳥が白い棒で高等部に行く姿が思い浮かんだ。

「ゴメンナサイ。」

「・・・ごめん。」

「いえ。私すごく楽しみにしすぎて思わず迎えに行っちゃって。」

「僕も。同じ・・・だね。」

二人して雨の中かさもささずになつこりと笑った。

「帰りましょうか？」

「うん。」

「明日また高等部の玄関で待ってますから。」

「いいよ。」

「え？」

「合格。」

「ん??」

何のことかわからずに首をかしげる飛鳥の肩を抱いて馨は言った。

「愛してるよ。」

飛鳥は赤面して腰を抜かしてしまった。

「ど・・・どうしたの!」

「嬉しくて。なんかもう期間を与えられただけで幸せだったから。」

につこりと笑う飛鳥。

馨はぎゅっと飛鳥を抱きしめて傘もささずに家へと足取りを向けた。

「馨先輩。」

「ん?」

「白い棒があー!」

「ああ!ごめん。」

「やっぱりな!」

「何がですか?」

「あいつはあのこを幸せにできるだろうって予想してたの。」

「へえ!。でも環先輩・・・なんか悔しそうですね。」

「そりゃ!!後輩に先越されたんだもん!!」

「・・・あれ?鏡夜先輩が奥さんなんですよ?」

笑いながらハルヒが言った。

環は口をあけっぱなしで鏡夜のほうを見つめてまたキノコ栽培を始めたとき。

（後書き）

なんか今日やお母さんっていいね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4103m/>

すれ違い （馨夢？

2011年3月12日20時38分発行